

没後26年、アキヒコの継承にむけて —新世代・気鋭のリーダー3氏による講演—

第26回 AKIHIKOの会開催



今年のAKIHIKOの会は例年より一週間ほど遅い三月二七日の開催となりました。始めに三月一日に東日本を襲った大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りして黙祷を行ない、世話人の米沢慧さんの司会で三氏による連続講演、コーヒーブレイクのあと質疑応答という形式で行ないました。

トップは写真史研究の戸田昌子さん。案内では「戦場カメラマンと写真誌の系譜」でしたが、三月一日に大震災が起こり、急遽「災害の記憶を継承する―関東大震災の写真アルバムをめぐって―」に変更して、一九二三年の関東大震災を記録した生写真や個人の写真アルバムを事例に、災害の記憶は写真にどのようにとどめられ、どのように継承されてゆくのか。ま

た今回の大震災で撮影された圧倒的膨大な資料をどう捉え直すかなど、災害の記憶の伝承について語り、タイムリーな話題を提供しました。

続いて比留間洋一さん。静岡県立大学国際関係学部が今年度(H22)10月より展開している教育プログラムについて語りました。自身もプロジェクトメンバーの一人で、文科省「大学教育推進プログラム」に採択された教育プログラム「フィールドワーク型初年次教育モデルの構築」。比留間ゼミでは、「岡村昭彦文庫ミュージアム化プロジェクト」と銘打って、二〇一一年三月一四日から二二日にかけてベトナム(ソンミ、ホーチミン、ベンチエ)でフィールドワークを実施。そのホットな成果の報告がありました。現在、その成果が八月一日まで静岡県立大学附属図書館岡村昭彦文庫で展示されています。

そして最後の高草木光一さんの演題は「岡村昭彦の一つの読み方―「差別」と「破壊」の歴史観」。高草木さんは二〇〇八年、慶応大学経済学部での特別講座「連続講義「いのち」から現代世界を考える」を主宰、「いのちの同時代史」という観点から、戦場からホスピスへと向かった岡村昭彦に着目された経緯があり、最近、第二弾として『一九六〇年代未来へつづく思想』を発刊したばかり。今回は、岡村昭彦との出会い―「訪問インタビュー」(NHK、一九八四年)、岡村の「差別」史観―「世界史のシッポ」を捉えるまで、「破壊」史観―「神の水」をめぐる闘いについてなど、熱く語りました。

三者三様で、あらためてアキヒコを啓き、アキヒコを継承する―そんな新鮮で楽しい交流の集いとなりました。出席者は五一名、今年は計画停電の影響もあり懇親会は行ないませんでした。

災害の記憶を継承する ——関東大震災の写真 アルバムをめぐる

と だ まさ こ
戸田 昌子

(武蔵野美術大学非常勤講師)



ただ今、ご紹介いただきました戸田昌子と申します。よろしくお願いたします。

最初にお断りしたのは、当初ご案内していた

演題は「戦場カメラマンと写真雑誌の系譜」だったんですが、この東日本大震災に関連して、2週間あまりの間にテレビやなんかでズーツと見てきた映像というのがあって、その中でどうしても今お話したいことがあるので、変更させていただければと思います。今回のお話は私自身が写真史研究者として五・六年のあいだ関わってきた関東大震災の古い写真群についてなんですが、こうした古い写真を見直すことはおそらく、いま岡村昭彦を考えるとということ、なにか重なってくるのではないかと考えています。

岡村昭彦は、私にとつては両親と親しかったからということと身近な存在なんです。私は岡村に会ったこともほとんどないし、世代の差もあって、岡村の写真が発表された当時のアクチュアリティをもっていないということがあります。そうした中で私は写真の研究をしながら岡村の写真について考えて来たということがあります。

私が当初お話をしようとしていた内容については、最近こういう本が出まして（『戦場カメラマンという仕事』洋泉社刊）、それに関連するお話でしたので、そちらを見ていただけたらと思います。この記事では、日本の写真雑誌がどのように始まって、その中で戦場がどのように写され、あるいは伝えられてきたのかについて書かれているので、よろしかったら手にとってみてください。

この記事の最初のところを少し読んでみます。「戦場カメラマンがスターであったのは何時のことであつたらう。それはおそらく太平洋戦争からベトナム戦争へかけての時期だったのでないだろうか。そしてその時代とはまさに雑誌グラフィの全盛期と重なっていた」とあります。スターというのは少々センセーショナルな言い方なんです。が、これを書いたとき私の頭にあつたのは、戦場を駆けめぐる戦場カメラマンという職業が、今の私たちの生活というか現在にとつて、何かしら重要な意味を持つという時代はもう終わっているのではないかという問題意識だったんですね。

そういう時代のなかで、岡村の写真を中心に戦場カメラマンの系譜のなかに置くことよりも、彼の写真を既に終わったものとして、つまり過去の古い写真として、現在の時代のなかで見直すことが必要ではないかということを考えていたわけです。そのことが、今回こうして関東大震災の古い写真群を、いまの現在において見ることにつながっています。つまり、私自身がやってきた関東大震災の写真の研究を、東日本大震災という出来事の起った現在のアクチュアリティの中で、どういうふうに見直していくのか、と考えているわけです。

関東大震災の写真については既にあちこちで出ていますけれども、私に関わったものとしては、

東京都慰霊堂におさめられた関東大震災の写真群の調査とあります。この調査の成果は、二〇一〇年に災害史研究の北原糸子先生が中心となって吉川弘文館から出版された『写真集 関東大震災』にまとめられています。東京都慰霊堂というのは関東大震災で被災した犠牲者の慰霊のための施設で、関東大震災は死者が十万人とか家屋焼失四十五万戸といわれる非常に大きな震災でしたが、その慰霊のために作られて、一九二九年に落成しています。今でも墨田区の横網町公園にあって、後に東京大空襲の犠牲者を合祀する形で統合されて現在では東京都が管理しています。

東京都慰霊堂には非常に多くの写真が残されていて、慰霊堂は震災当時から災害の記録を後世に伝えるために写真を含めたさまざまな資料を収集してきているということがあるんですけども、やはり関東大震災がもう既に凄く古い時代のことになってしまっているという問題があります。関東大震災は一九二三年九月一日ですが、それからすでに八十八年たっています。慰霊堂の隣に展示施設が併設されていますが、展示替えもほとんど行われないし、学芸員もないような状態になってしまっています。そんな中で写真資料がほとんど死蔵されるような形であったんですね。それをなんとか見直すというか、再活用するにはどうしたらいいかということで、東京大学の木下直之、社

会学の佐藤健二、神奈川大学の北原糸子などの先生方が中心になって調査プロジェクトを組んで、私もそこに参加させてもらったわけです。

慰霊堂の写真資料には、当時集められたものもあるのですが、それだけではなく、これは慰霊堂の資料に特徴的なことなのですが、だいぶ後になってから集まってきた資料などがあります。例えば東京都民が、自分が持っていた震災に関連する写真とか絵葉書とかいろいろなものを、だんだん持ちきれなくなって震災記念堂に送るというようなことをするわけです。資料を持っていた人がたとえは亡くなってしまつて、遺族がそれをどうしていいかわからないんだけど、何か震災の関係のものだからということで慰霊堂に送りつけるということがあるわけです。慰霊堂にはこういった資料がたくさんあって、アルバムに貼付けられたものや、絵葉書の類だとか、わざわざ収集されたわけではない資料が凄くたくさんあるんですね。

この写真は震災記念堂を写した写真絵葉書です。震災記念堂というのは東京都慰霊堂の落成当時の名前で、戦後になって東京都慰霊堂と名前を変えています。一九二九年の落成直後に撮られたもので、見た目は仏教寺院のような様式に慰霊塔がくつついています。最初のプランは洋風の建物だったんですが、それがなかなか日本人の心情に

見合わないということで、伊藤忠太が設計しなおして、こうした形になったそうです。これは落成式の記念絵葉書ですが、こういったものはたくさんあります。

建物の中ですが、ちょっと見た感じはキリスト教会のような作りになっていて、写真や資料を展示するスペースがこちら辺にあります。これとは別に展示室、展示施設があります。この写真は内務大臣の後藤新平が落成式で式辞を読んでいるところです。たぶん神道形式のお祀りなんだろうと思うんですけども、そういうような慰霊の仕方です。つまり慰霊堂というのは中身は洋風テイストもあるんだけど、お祀りの仕方は日本人の心情に見合う形でというような、そういうやり方で行われている。毎年九月一日に慰霊祭が行われています。ちなみにこの写真が慰霊堂の最初のプランで、前田健次郎の設計です。当初はこういう洋風の建物になるはずだったんですね。

この写真は展示施設です。復興記念館と呼ばれています。今でも構造はほとんど変わっていません。非常に立派なものです。展示物には写真資料もありますけれども、関東大震災は火災によって死者がたくさん出たということがあって、火に燃えてぐにやぐにやと曲がった自転車とか、そういった実物展示もたくさん行われていたそうです。



展示室の中でどんな写真が展示されていたかというのですが、ちょっと退色していますが、これが当時、実際に慰霊堂の中で展示されていた写真です。歌舞伎座の付近が燃えて建物の壁だけが残ったという写真ですが、こうして実際の展示に使われた写真が残されていて、これが何度も繰り返し使われた写真だということは裏側を見るとよくわかります。こんなふうに倒壊した建物とか、

慰霊堂にはこうした悲惨な写真がたくさん残されています。

今回の震災でもそうですけれども、たとえば津波の押し寄せる映像とか、繰り返し見せられている映像というのがみなさんあると思います。特に当時の私にとって、こうした悲惨な災害の写真を集めるのを見るということは、大きな精神的な負担だったというか、どう受け止めていいか、処理しきれないような気持ちがあったんですね。これは都市の防災をどうしていくかという教育的な目的で展示されていたわけですが、その中に悲惨な写真というのが凄くたくさん出てくるのです。

これは二重橋の皇居前広場に被災者が集まっているのを撮った写真ですね。これは間違つて伝えられることが多い写真で、実は皇居前広場を撮った写真なのに、間違つて本所被服廠跡の被災者の写真だと言われることがあります。被服廠跡というのはいま横網町公園があつて慰霊堂のあるところですが、ここでは四万人が避難した後に起つた火災で、避難者がすべて亡くなったところなんです。これは皇居前広場なのに、被服廠跡が火災で焼ける直前の写真だと言われていたものです。それからこちらは浅草十二階を写した写真ですね。これは浅草にあつた十二階建のビルディングで、日本で最初の電気のエレベーターを備えたことで有名ですが、被災して八階からボコッと折れてしま

つて、非常に危険なので陸軍が出て爆破をしたときの写真です。これも関東大震災の典型的なイメージで、繰り返し使われていたイメージです。これは報知新聞が出していた雑誌ですが、ここでも浅草十二階の写真が使われています。タイトルは『大正大震災写真帖』とついでいて、発行は一五日なので震災後二週間の発行です。

また、例えばこれは、被服廠跡で亡くなった人たちの遺骨の山を写した写真です。陸軍の被服廠というのは、兵隊さんの軍服なんかを作っていた大きな工場だったんですが、その二万坪という広大な敷地が公園用地になって残っていて、それが当時、そのあたりの地域の災害時の避難場所になっていたわけなんです。そこに非常に大勢の人たちが避難した。最初はみんな災害を逃れてくつろいでいたのですが、午後四時頃に火の手が上がった。そこには非常にたくさんの人が密集していて、さらに荷車とか布団を持って避難していたので、火がついて人も物も全部焼けてしまった。その時の犠牲者の遺骨の山ですね。この写真は絵葉書になったものがたくさんあるんですけども、火災前の被服廠の写真と、被災後の遺骨の山の写真をセットにしたようなものもあるんですね。

これは当時、新聞社のカメラマンが撮影した写真です。東京都慰霊堂には、まとまった形で新聞社から受け入れたという写真の束があつて、これ

はその中であつたものです。これは震災直後に軍人さんたちが救助活動をしている写真ですが、当時、予備軍人や退役軍人に招集がかつた場合、軍服で駆けつけるべしという通達があつて、そのため震災後には町中に軍服の人々が溢れたということがあつた。写真もそうした震災後の新しい風景を見せようとしたものでしょう。

また、後の時代になると、復興に関わる展示物も増えています。これは復興建築です。帝都復興祭が一九三〇年に大々的に執り行われるわけですが、それでも、それに向けて作られた建造物ですね。「復興橋梁」と言われたりします。この写真には「厩橋復興」というタイトルがついていますが、こういった復興の記録も集められています。

こうしたことが、慰霊堂の資料の特徴的ですね。まず震災当時の資料写真、非常に悲惨な、犠牲者の遺体写真とか遺骨の写真などのうえに、復興とということがどんどん積み重なっていくような資料の集められ方がされているんですね。中には主体的に慰霊堂が集めたものもあります。中には主体的に慰霊堂が集めたものもありませんが、同時に一般の人たちが、自分の家の中にあつたもの、当時売り買いされた絵はがきなどを、十年、二十年、三十年、四十年という長い時間のなかで、慰霊堂に集積させていくということがあるんです。その中に、大量の死体の写真というのがあります。それはとにかく大量なもので、慰霊堂の写真資料の

三分の一を占めると言つてしまつたら大げさかも知れないけれども、それほどたくさんあるんですね。それをズーツとスキヤニングをして複写をしてということをしていつたわけですが、ずっとやつていたら気持ち悪くなつてしまうような、なんとも消化しきれない厩大な量だつたということがあつて、そういうものが何十年もかけて慰霊堂に蓄積されてきたわけです。

これは焼け跡の焼死体の写真です。ガラス乾板なのでネガポジ反転していてわかりにくいですが、背景に新聞紙があることからわかるように、写真を複写した複写ネガです。慰霊堂はこうした複写をたくさん作つていきます。慰霊堂にはこうして印画紙の形で残されているものも多いですけれど、一般的にはむしろ絵葉書になつて残されているケースが多いですね。この写真は印画紙ですが後ろにこのようなメモがついています。「中央区堀切町」という住所と寄贈者の名前があつて、「被服廠跡写真一葉寄贈」とあつて、日付が「昭和三十一年九月一日」となっています。つまり昭和三十一年になるまでズーツと家庭の引き出しの中に仕舞われていたような写真を、九月一日に慰霊堂に寄贈してわけです。それはまさに慰霊のためということ、おそらくはもつていた人がもちきれなくなつて慰霊堂に寄贈しようと思つた。こういった焼死体の写真が、そういうふうにして慰霊

堂に大量に集積されてゆくわけです。

当然のことですが当時、こういう写真を取引すると取り締まられるわけです。『大正大震災写真帖』にも社告として「その筋の注意により死傷者の写真を掲載せず御了承を乞う」と書かれています。当時の記録では、一日当たり六千枚の写真や絵葉書が押収されたとありますが、それは逆に、こうした悲惨な写真がそれだけ流通していたことを証明しています。当時、報道機関が罹災して空白状態にあつたので、写真絵葉書が報道写真の代わりとして機能したという事情もあつて、尋ね人の広告を写した写真だとか、昭和天皇の被災地訪問の写真なんかも絵葉書になつていきます。

震災絵葉書といえば、慰霊堂の調査の後に私が偶然見つけたものがあります。これは別の調査で行つたご家庭からヒョツと出てきた十枚組のポストカードです。これは震災後の焼け跡のパノラマで、震災関係の写真を貼付けた個人のアルバムの間に挟まっていたものですが、アルバムを作った人は罹災したわけでもなく、震災の復興などに関わつたというような事跡のない人です。全く関係ない人のアルバムのなかに、震災の記録がひよいと入ってくる。ちなみに写真自体は当時、東京の街中に出れば誰でも買うことができた類のもので、慰霊堂にもそうした震災関連のアルバムがあり

ます。これには「関東大震災記録写真集」というタイトルがつけられています。これは東京の清島尋常小学校の先生が作ったアルバムで、子どもの絵が描かれている。「惨禍」という文字が描かれてあって、特徴的な字です。中を開くと、地震発生直後の写真から、猛火に包まれた建物、そして救助といった写真が説明書きと一緒に並べられていて、フォトストーリーとしても非常によく作られています。これは教育的な目的で作られたもので、おそらくはアルバムを見せながら、震災の記憶を継承するために使われたのだと思います。またここにはたぶん、子どもたちの記憶を整理させる、痛ましい震災の記憶を癒すというような意味がおそらくあったんじゃないかと思えます。

振り返ってみれば私たちはこの二週間くらいの間、今回の大震災のイメージをテレビや新聞を通して見ながら、そのイメージに圧倒されているわけですよ。関東大震災でもこうした膨大なイメージが溢れたわけですが、そういった自分の許容力を超えるようなイメージというものをどのように自分で消化してゆくか、どうやって読み変えようとしているのかということが、このアルバムからは見ることができるとは思いますが、このアルバムがここにあり、写真を所有し直すという行為がここにあり、

関東大震災のような非常に大きな災害があつて、溢れかえるイメージが自分の許容量を超えてしまうなかで、記憶をどのように自分自身で所有し直すかということ、それをどう主体的に読み直すかということが、このアルバムには表れていると思うんですね。アルバムという、自分で糊をつけて貼付けるといふ写真の持ち方には、そうしたイメージを所有し直すという行為が見えやすいということがあります。

これはおそらく、教育的な必要性もなくなつてから慰霊堂に寄贈されたものでしょう。こういったアルバムはそれほど多くないけれど慰霊堂にはあります。こんなふうに、当時販売されていた震災絵はがきをただ貼付けたアルバムもあります。これを見て行くと、現在の写真絵葉書とは違って、報道写真の役割を担うような写真が多いです。避難民の生活とか、新聞の社会面に載つていそうな写真ですよ。そしてやはりその中には、こうした遺体や焼死体の写真がある。必ずこういうものが出てくるわけです。

こういう写真もあります。どういう事情か全くわからないんですが、お母さんと子どもが正装して写真館で撮影した写真です。裏を見ると「わが妻よ、わが妻よ」と書いてある。事情が分からないので想像にしか過ぎないんだけど、被災した自分の妻の写真を慰霊堂に送ったのではなから

うかと思えます。こうした写真は、先ほど言ったように、写真をどのように自分のなかで所有し直すかという問題を考えさせるものですね。つまりこの場合は、おそらくは被災した母子の写真を慰霊堂に送ることによって自分の中の慰霊という行為を行っていると考えられるわけです。

例えばこんな写真もあります。これは木下直之先生が何度か取り上げておられるので、ご存知の方がいるかと思いますが、これも慰霊堂にあるものです。同じ写真が『写真で見る関東大震災』の最後に掲載されています。これは写真館の出張撮影だろうと思いますが、ちゃんとプリントして、台紙に貼られています。裏をめくるとこういうことが書いてある。「大正十二年九月一日大震災に被災し：家を失った」とあって「荷を持って逃れたり。家財全部を失いたるも異常なきを不幸中の幸いとして喜ぶ。犬や猫や鳥や鳩二羽さえ助けた」と書かれている。

この写真は、罹災後一年たつてから、当時逃げ出した時の恰好をして記念写真を撮るということをしたもので、非常におもしろいシチュエーションです。後ろの建物は「一年を過ごせしバラック御殿なり」とあります。自分たちが震災から一年間暮らしたバラックの前で、震災で避難した当時の恰好をして記念写真を撮るわけです。これは、彼ら自身の復興というか、自分たちが震災後どの

ように再生したかということを主体的に記録しようとして撮った写真だろうと思うんですね。こんなふうに台紙に貼られて、だいぶ汚れていますがおそらくこの状態で家の壁なんかには貼られていたのではないかと思います。こうしたものを掲げ続けることで、この写真に写されたこの家族は再生していったのではないか。そしてこれを慰霊堂に寄贈するということをして、最終的にひとつの区切りにしたのではないかと思われるのです。

いま、震災から二週間余りしかたっていない中で、復興とか慰霊とかという話をするのは不謹慎ではないかとも思うのですが、こうして写真の眼差しの前に自分たちの姿を晒すということには、自分たちの記憶をどう所有し直していくかという問題があると思うのです。

また、復興ということを考えたときには、例えばこういう写真があります。一九三〇年に改造社から出た『大日本地理大系 大東京篇』に入っている航空写真で、両国橋と国技館が写っています。空から見て町がこれだけ復興したよという写真ですが、こういった上から見た復興の眼差し、つまり建物がどれだけ建て直されたかとか、道がどれだけ広くなったかというような眼差しというのがひとつあります。その一方で、その対極にあるのが慰霊堂にあるこの家族写真なんだろうと思うん

ですね。でも両方とも復興ということに関わっている。こちらの家族写真の人たちにとつての復興というのは、おそらく慰霊ということと非常に深く関わっていて、いまのこういう災害の中でどういふふうに復興していくのかということを考えてきたときには、この両方の復興について考えなければいけないんじゃないかなと思ったりするわけです。

私は東大の文化資源学というところにいたので、これまで古い資料をどういふふうに再生させるのかについて考えてきたということがあります。かつてそこにあつたけれども忘れられた写真、写真に限らないですけれども、それを現在のなかでどう意味あるものとして読み変えていくか、再生させていくかということを考えてきたんですけれども、そこで重要なことは、現在起こっていることの中で何を、どのような古い記憶を再生させるのか、ということだったんですね。

私はこれまでも岡村昭彦という人について考えながら、同時に岡村の写真を研究者として評価することの難しさをいつも考えてきました。岡村の写真はまだ、完全に古い歴史になりきっていない時代の、比較的近い過去の写真です。けれども私自身にとつては生まれる前の写真でもあるわけです。私には岡村の写真を見た当時の人たちが、どんな衝撃を受けたか、どう受け止めたかについて、

自分の実感としてどうしても分かり得ない部分がある。けれど米沢さんがさきほど「歴史になった」と言われたように、そうして一度岡村の写真を「過去のもの」としたうえで、それをいまいちど現在のものとして再生していくことが必要なんではないかと思っているわけです。

いま、岡村昭彦のポジフィルムが東京都写真美術館に寄託というかたちで入っています。今後はそれを調査したうえで活用の方法を考えなくてはいけないのですが、そのときに、当時のアクチュアリティとは異なつた現在のアクチュアリティのなかで、どのように岡村の写真を見るのかを考えていきたい。おそらくそれが写真の研究者として私が考えなければいけないことだろうなと思つています。纏まらない話になってしまいました。こんなところで……。ありがとうございました。

【略歴】1975年生まれ。99年上智大学文学部新聞学科卒業。09年東京大学大学院人文社会学系研究科文化資源学専攻修士課程修了。ジャーナリズム、印刷技法、書物史などの観点から日本を中心とした写真史の研究活動を行う。09年度日本写真芸術学会奨励賞受賞。現在、東京総合写真専門学校、武蔵野美術大学非常勤講師。共著に飯沢耕太郎編『日本の写真家101』（新書館、08年）がある。

岡村昭彦文庫ミュージアム化プロジェクト

ひるま 比留間 洋一

(静岡県立大学岡村昭彦文書研究会世話人)



みなさんこんにちは。静岡県立大学の比留間と申します。宜しくお願いします。

私は、今回は「岡村昭彦文庫ミュージアム化プロジェクト」と題してお話させていただきます。

「update2010年度岡村昭彦文庫」、「岡村昭彦文庫とミュージアム」、「学生による展示会プロジェクト」という三つの話題でお話します。

update、岡村昭彦文庫の活動についての情報を更新するという意味です。五つあります。

まず五月に大和・生と死を考える会の大会で、岡村昭彦文庫内にあるホスピス関連の本を展示させていただきました。

次に岡村昭彦さんの本は一万六千冊といわれていましたが、オーパック(OPAC)入力していない雑誌がありまして、入力した結果、現在一万八千冊になっております。

三つめに、二〇一〇年三月に岡村春彦さんのお宅にお邪魔して、フィルムは東京都写真美術館へ、蔵書その他の資料は県立大学に寄贈して頂きました。その中に貴重な当時の『LIFE』を含めた岡村昭彦さんの著作など色々な本がございまして、それも今後、図書館の協力で入力、OPACに入っていくとそのようなことになっていきます。

四つめに、「岡村昭彦文庫ミュージアム化プロジェクト」の一環としてですが、ブログを開設しました。私は岡村昭彦文庫の魅力を伝える、エッセイを書いていこうと。岡村昭彦さん本の中には赤線が丁寧に引いてあるんです。どこに線をひいているかと、そういうところに着目しながら、様々なテーマでエッセイを書いていきたいなと思って

います。

五つめに、岡村さんと母親たちの会の勉強会の残した二〇〇本ぐらいのテープがあります。

テープの文字起こしを、しているんですけども、今年はお手元にあります『ホスピスの心を求めて』というタイトルでホスピス関連のテープを三本起こしたものを、収め刊行しました。

以上が今年度の update です。

そして次に、「岡村昭彦文庫とミュージアム」。ミュージアム化プロジェクトといって、大そうなことを銘打っていますけども、やれることからやっつけていこうというスタンスであります。

皆さんのなかにすでに気付いておられる方も勿論たくさんいらっしゃると思いますが、ミュージアムという視点を入れると、岡村昭彦さんの集めた本に対して、一つ新しい見え方ができるなということに気付きました。

母方の祖父である佐野常民さんが、日本の博物館の歴史の中で博覧会、博物館の産みの親としてできます。博覧会の父ともいわれています。佐野常民さんは勿論、赤十字の創設などでも有名なわけですけども、かたや上野の公園が今あのようになっている、産みの親の一人は佐野常民とされています。

例えば代表的な本として、吉見俊哉という人の『博覧会の政治学 まなざしの近代』という本のなかの一節を引用させて頂きます。

一つめに、このようにかいております。

「ウィーン万博に關与した明治政府の要人たちのなかで、ヨーロッパの万国博が根底に潜ませている権力の技術論を最も鋭敏に見抜いていたのは、このとき出展の準備作業から報告書作成までをとりしきった佐野常民である。彼は、すでに一八六七年のパリ万博の際、佐賀藩の使節団に加わっているから、万国博への参加はこれが二度目である。そのせいもあるう、彼は、博覧会が貿易振興の手段というにとどまらない、近代特有の文化的制度であることを見抜いていくのだ」と。

そして二か所目に、このようにあります。

「一八七五年になってから刊行されたこの報告書」、この報告書は、なぜ岡村文庫のなかにあのように多様な分野の本があるのか、ということに重なるかと思うんですが「たんにウィーン万博だけでなく、農業、林業、工業、道路、鉄道、貿易、教育、兵制、風俗等々、西欧各国の産業や制度全般に関する膨大な記録である」と書かれています。

次にもう一つ、思いつきですけども、岡村昭彦

さんのカメラということにオーバーラップして興味深いなと思っていることがあります。これは佐野常民自身による文章です。

「博物館の主旨は、眼目」、目です、目において「人の智巧技芸を開進せしむるに在り」。一部省略しますが、「悉く眼視の力に頼らざるなし」眼視、眼で視る力に頼る、「古人云ふあり、百聞一見に如かずと。人智を開き工芸を進ましむるの」、私の言葉でいいますが、最もよい方法はこの眼目の教えに在るのみと。眼の力によって教えることにあるということです。

この着眼点は、岡村昭彦さんにとってのカメラとオーバーラップしないでしょうか。岡村昭彦さんが訪問インタビューで「カメラは武器である」というときに、カメラというものはインターナショナルに通用する記号として考えていたと、そういうくぐりがあったことを私は思い起こしました。

さきほど上野の動物園の産みの親の一人ともいいましたけども、「初期の構想に博物館には術行練習場を付設し、周囲を公園にして動物園と植物園を開設し」と、このようにあり、佐野常民は開催地を上野にして、一八八〇年に日本初の国家的な博覧会をひらくべきことを提案しています。

佐野常民について、岡村文庫内にとどのような本があるのか、一例を調べてみたところ、NHKブックスの、一九七〇年にでている『万国博覧会 美術文明的に』という本が二冊あります。二冊ともに、赤線の書き込みがあるわけですけども、基本的にはかなりだいたい同じところに引いてあるんですよね。いつその赤線を引いたのかわからないんですけども、だいたい同じところに引いてある。

まず一冊目。こつちが先じゃないかって私は思っているんですが、その理由は七七頁の、佐野常民のくだりのところの下に赤いボールペンでピッと横線がひいてあって、そこに「佐野常民」と赤ボールペンで書いてるんです。

「五月佐野常民は理事官として、出品事務の責任をおうことになった」というところに線がひいてあり、その後ずーっと赤線が引いてあります。その最後八八頁にこのように書いてあります。「そして佐野の構想は富国強兵、殖産興業の明治政府のスローガンによって内国勸業博覧会として実を結ぶのである」と。

そして二冊目の本をみますと、だいたい八六頁から八八頁はさきほどと同じところにきちっと線が引いてあります。一冊目の場合は先ほどの箇所、佐野常民に関する箇所にもう一つも一注目して



る、二冊目に関しては、一二三頁。それは例えばこの本の左肩のところに赤のボールペンで四本サツサツサツと引いてある、こういう箇所はこの一カ所だけです。ここは、「内国勸業博覧会のあゆみ」の章で、その中でこの一文に線が引いてあります。「この富国強兵政策の推進者は最初に内務卿となった大久保利通だった」と。大久保利通がやった富国強兵政策の為の内国勸業博覧会というところにとくに線が引って張ってあります。

岡村昭彦さんは場合によっては、一つはこの本を頼りに、博覧会資料を集めていったのかなと思ような書き込みがしてあります。

では博覧会の文献にどういふものがあるのか。岡村昭彦文庫には非常に貴重なものが含まれています。静岡県大のOPACで「博覧会」というキーワードで検索すると、ざっと四八冊ぐらいでくるわけですけども、そのうちの半分以上が岡村文庫の本になります。

このあたりの詳しいことは、ブログ上でエッセイに書くつもりですけども。これが博覧会というキーワードで検索した結果、でてくる岡村昭彦文庫内にある博覧会関係の資料です。

年代順に並べましたが、一番古いものは一八九一年の『第三回内国勸業博覧会審査報告』、そして次にさきほどの、佐野常民が参加した一八九七年の『澳國博覧會參同記要』、そしてその後一九〇六年『こども博覧會』、『拓殖博覧會』一九一三年、『大正博覧會』、『發明品』、そして「北海道出品」『大阪計量博覧會』これも一九二三年、二七年、二七年、二八年と非常に古いものが揃っています。「日滿興産」など植民地における博覧会資料もあります。

岡村昭彦さんは何故ああいう文献を集めたのかなという問いに対して、勿論いろんな切り口はあると思いますが、一つ、日本の資本主義発達史においてミュージアム（博覧会）の果たした役割と、佐野常民という人とのつながりが見えてきたのが非常に興味深いなと思いました。

三つ目の話題は、学生による展示会プロジェクトです。「岡村昭彦ミュージアム化プロジェクト」について経緯を説明します。文科省のG.P.、グッドプラクティスといい優れた取り組みに対して、大学が申請したら、文科省が認定し、財政的支援もしますよと。そういうのが大学改革の一つのプログラムとしてあります。

それが今年度採択され三年間続きます。どういう内容かといいますと、静岡県立大学国際関係学部のテーマはフィールドワーク型初年次教育の構築です。

フィールドワークはいろんな大学でやっているんですけども、一年生を海外に連れてくフィールドワークっていうのはないんですね。鉄は熱いうちに打てということをやってみて問題や効果を検証し、そのモデルを構築すると、そういう趣旨です。

五つの海外フィールドワークのうち、私はベトナムを担当しております。一月からゼミを初めて、三月一四日から二二日まで短期フィールドワークを行ってきました。フィールドワークのかわりを教えるくらいなものです。

参加したのは一七名、一年生九名、上級生五名、補助員二名です。

一年生からいくつか我が意を得たりという言葉をもらったんですけど、その一つは、まさにインタビューについていろんな質問項目を考えているときに「あ、私、大学に入って学んだことが初めて今、役に立ちました」とか、もう一つの言葉は「デイズニールランドに行ってる場合じゃないですね」という言葉。嬉しかったです。その学生はバイトをしてお金をためてそしてこの為に自分の貯めたお金を使ったわけですけども、今まではそういうお金でデイズニールランドへ行っていた、でも今回ベトナムにきて、行ってる場合じゃないなと。

一年生に対して色々ところやりとりをする中で結果として、展示会のテーマだけは私が出させていただきますということになりました。落語の三題話に例えて、三つのお題を出すのであとのス

トリーは皆さんで考えて下さいということにしております。

一つが「戦争の記憶」。特にベトナム戦争を意識してるわけですが、もう一つが「今、ミュージアムができること」。三つめに「人は人間(ひと)から学ぶ」これは岡村昭彦さんの言葉。細野容子さんが『シャッター以前 5号』に書かれていたと思いますが、この三つめの言葉を具体化したものとしてインタビューを入れました。

ただ単に現地でもベトナム戦争の記憶を展示しているミュージアムに行ってみるだけではなく、その関係者の誰かに必ずインタビューして下さいと。

あまり時間がありませんので一つ一つについてはちよつと詳しくご説明せまません。ここでは三か所だけ紹介します。まずソンミ証跡博物館。

みなさんもベトナム戦争の時に聞きになったかと思いますが、一九六八年三月一六日に米軍によって五〇四人の民間人が虐殺された事件。翌年六九年になって発覚し、それがベトナム、アメリカ、そして世界におけるベトナム反戦運動に非常に重要な役割を果たした事件です。

二〇〇三年に現在の博物館の形になり、現在の

館長さんバン・タン・コンさんに学生がインタビューをしました。

コン館長さんは、もともとホーチンミン共産党の青年団で活動されていて、その後ホーチンミンに行つて、ミュージアムを専攻し、村に戻つて、二〇〇三年に博物館のリニューアルを手掛けた。六八年当時少年だった、その数少ない生き残りの方の一人の方です。博物館の形は、お墓をイメージしてるそうです。五〇四人の方の共同のお墓をイメージしていると。

中に入ると、まずソンミ事件の前の村の様子がジオラマで展示してあって、非常に美しい村だったわけですね。生活用具はこのようなものを使っていました、そして背景にベトナム戦争が描かれ、ソンミ事件に関わった米兵たちの状況が描かれ、そして事件がこういうふう起こったんだと。そして現在村はこのように発展してきたと、そのような内容になっています。

ここは博物館があるだけではなく、大きな一つの遺跡区として整備されています。例えばこの道。当時は土だったわけですけども、米兵の靴の跡、村人の靴の跡、そして逃げようとする自転車の轍と、このようなものが当時の生き残った人たちの記憶を頼りに再現されている。工夫が色々みられ

る博物館になっています。

三月一六日には毎年追悼式典が行われていま
す。私たちも参加させて頂いて、お花を献花させ
て頂き、南山大学の藤本博先生と学生も来ていま
した。あとアメリカ人のもとベトナム戦争に参加
したベテランの人ですね。今ここで色々な支援活
動をしているアメリカ人の一団なんかもいてです
ね。これは子どもたちが式が終わった後に、線香
をワーツとりにきてるところですね、捧げる為
に。

先ほどの戸田さんのお話じゃないですけども、
私も大震災直後の日本社会の状況の中で、そもそ
もベトナムに一四日に行くことも勿論ためらわれ
ました。実際学生の一人は行きませんでした。募
金活動しますと。別の二人も直前まで非常に迷っ
ていました。そもそも行けるかどうかはわかりま
せんでした。行ってよかったかどうかはわかりま
せんけども、ここでぜひ伝えなければいけないと
思ったことは、ベトナムの方々からいろんなメッ
セージをもらったことですね。私がベトナムに深
く関わってるからっていうことが大きいですが、
何回も感動させられました。ソンミのときも驚い
たんですが、厳粛な式典なわけですけども、まず
冒頭に、日本の被災者の方々の為に黙とうがあり

ました。その後にソンミの方々の為に黙とうがあ
りました。

実はソンミは、非常にシンボリックな事件とし
て位置づけられてますけども、民間人虐殺はあの
あたり一帯に非常に多くあったわけです。

だからソンミは特別ではない。ベトナムの国家、
そして世界から注目されているっていう意味では
特別なんです。が、事件自体は実は特別なもので
なかった。

そういうことは今、色々明らかにされています。
その中の一つが韓国。韓国はずっと九〇年代まで、
韓国兵がベトナムに何をしたのか全く知らされて
いなかった、ヒーローとしか理解していなかった。
でも、少しずつ漏れ伝わってくる。

それで、九〇年代に入ってナワウリという市民
グループが、自分達で、韓国兵が何をしたのかわ
かっているのを調べ出しました。この付近では韓国兵
が民間人を虐殺した場所がいくつもあるわけです
ね、でそういうところは暫くして憎悪碑が建てら
れます。だいたい、村人の側で。ナワウリは慰霊
碑のない場所に村人と共同で慰霊碑を建てていっ
た。

この本（『戦争の記憶 記憶の戦争 韓国人の

ベトナム戦争』）のなかにかかれていたんですけ
ど、ナワウリは日本軍の従軍慰安婦にも関わって
いる。従軍慰安婦の方がもうかなりご高齢で、日
本からもらったお金を、このナワウリに寄附して
いるそうです。ナワウリがベトナムでこういう活
動してるってことを知って、ベトナムで、韓国人
によって殺されてしまったベトナムの民間人の人
達の慰霊碑に使って下さいということが書かれて
あります。この事実は重い。幸いそのうちの一つ
に行くことができました。二〇〇九年にリニュー
アルし、韓国人の若者がその村でホームステイを
したりもしてるそうです。

最後に山元昭さん、この方に出合えて非常に良
かったです。

この方は『続南ヴェトナム戦争従軍記』（岩波
新書）にある岡村昭彦さんの収容所の場所に二回
も行ってます。収容所の場所がどこか知っている
のは多分日本で唯一人なんじゃないかと思えます。
そして元解放戦線の方と今も非常に親しい。

いったい何故、岡村昭彦さんがしばしばこの方
に会い、そして石川文洋さん、開高健さんがこの
方と仲良かったか、会ってみてよくわかりました。
解放戦線の方と仲がいいし、なんでもみてやろう
というんなことについて、自分の解釈を加えずに、
豊富な話をしてくださる方でした。今もベトナム

で商売なさっています。

そして岡村昭彦の住んでいたアパートは現在、ありません。サイゴンの中心部ですから、いまの再開発で、あのフランス時代の建物は残念ながら取り壊されてしまいました。

これは郵便局です。「ザ・スピーキング・フォトグラフ」といってベトナム戦争の写真、日本人ジャーナリストたちが撮った写真のポストカードが売られており、その中に岡村昭彦さんの写真も使われています。

いずれご案内しますが、この展示会を県立大学の岡村昭彦文庫で開催しますので、是非いらして下さい。

ご静聴ありがとうございます。

【略歴】1972年生まれ。95年大阪外国語大学ベトナム語科卒業。03年京都大学大学院博士課程（文化人類学）単位認定退学。05年より静岡県立大学大学院国際関係学研究科助手、06年助教。担当科目世界の文化遺産等。論文に「静岡県内の大学とベトナム人留学生の受け入れ―グローバル時代の日本留学とその暮らし」（『国際関係・比較文化』2010）ほか。

佐藤純子（岡村昭彦・長女）さん

からのメッセージ



佐藤純子さんからのメッセージを読む、岡村昭彦の孫
佐藤名月（なつき）さん(右)と春花（はるか）さん

皆さんへ

三月一日、東日本大震災・大津波・原発放射能事故など次々といろいろなことがあり言葉がみつかりません。

第二十六回AKIHIKOの会もどうなるのかなど心配していましたが、こうして開催されて嬉しく思います。私自身参加できない事は残念で申し訳なく感じます。

三月一日の夜、私と末娘は近くの避難所で一

晩過ごしました。我が家は大丈夫でしたが、函館港近くの金森倉庫群から朝市・函館駅まで津波の被害にあいました。東北の被害が次々と映像でながれます。ただただ見つめるだけでした。長女の友人は実家とすべての土地・財産を失いました。御両親が無事だったのが救いです。陸前高田の蒲生孝子さんが無事のメールは本当にほっとしました。これからの復旧は簡単ではありません。

ラジオからお金のある人はお金を、力のある人は力を、知恵のある人は知恵を、時間のある人は時間を、何も無いと思う人は元気を送り続けようと、声をかけていました。今出来る事を大切に、AKIHIKOの会からパワー・エネルギーをいただいている一人として頑張りたいと思います。

先日、『戦場カメラマンという仕事』が洋泉社から刊行されました。父の後に多数のジャーナリスト、カメラマンがおられるのを知りました。父が伝説になっていく事も、不思議なカメラマンがあらわれた事も知りました。

長野でも静岡でも地震がありました。大学の皆さんは大丈夫でしたでしょうか？ 不安な日々が続きます。父は怒っているでしょうね。日本の自然を壊した事に、きれいな海をよごした事に、そして怒りながら悲しんでいる事でしょう。

少しずつ日常がとりもどされ、また来年一人でも多くの皆さんと同じ時間を共有できますように祈っています。

私の連絡の悪さは解消されず、ハイテクのスピードに追いつけずにお許しください。

二〇一一年三月二十七日

佐藤 純子

岡村昭彦の「一つの読み方」―「差別」と「破壊」の歴史観

高草木光一

(慶応大学経済学部教授)



I 岡村昭彦との出会い

二〇〇八年度、慶応大学経済学部「現代社会史」では、脳死・臓器移植から戦争や自殺まで、現代

世界を「いのち」の観点から総合的に捉えようと試みました。小田実と岡村昭彦の二人を「いのち」の問題をトータルに考えた思想家として位置づけ、彼らの思考を導きの糸として構想しています。国内外から二十人近い講師を招き、本会世話人の米沢慧先生にも岡村に関する迫力ある講義をしていただきました。その講義録は高草木光一編『「いのち」から現代世界を考える』（岩波書店、二〇〇九年）として刊行されています。

私が岡村昭彦と関わったのはこの試みが最初ですが、しかし実はずっと以前から私は岡村に導かれていたのかもしれないと思っています。

一九八四年の秋、私は大学院の学生で、荻窪の安食堂でラーメンか何かを食べておりました。そのときにたまたま食堂のテレビでNHK「訪問インタビュー・岡村昭彦」の第一回が放映されていたのです。その時点で私は岡村昭彦が何者なのか知りませんでした。画面に思わず惹きつけられました。食い意地の張っている私が、多分生まれ初めて、食べている途中で食べることを忘れてしまった。この世の中に、たった一人で世界を相手にし、権力に立ち向かっている男がいる。それは、ひっくり返るくらい驚きでした。

その後まもなく岡村は死去し、私も研究対象である一九世紀フランス社会思想史に沈潜していく過程で、岡村のことをいつしか忘れ去ってしま

た。私は大学に助手として残り、二年半のフランス留学から帰って来ると、たまたま寄附講座のコーディネイターの仕事がまわって来ました。スポンサーの顔色を伺うようなことは性に合わないと思っていたのですが、当時の学部長で、コーディネイターと一緒に務めた飯田裕康先生が「好きなようにやってよい。責任は私がとる」という態度で臨んでくれたので、「反権力」「反学問」を柱にした、かなり踏み込んだ講座をつくることができました。原子力資料情報室の高木仁三郎さん、在野の哲学者の長谷川宏さん、山谷で活動されている神父さん、ゲイやトランスジェンダーの活動家等々、あまり大学の教壇に立つ機会のない人々をお呼びして、しかも既成の学問の在り方に楔を打つような講座にしようと努めました。

スポンサーが降りてからも、細々とした資金で当初の理念を失うことなく講座はつづき、既に講義録は弘文堂から四冊、慶応義塾大学出版会から一冊、岩波書店から四冊刊行されています。

二〇〇八年度「現代社会史」の準備として米沢先生と打合せ会を行なったときに、思いがけず米沢先生から一九八四年のNHK「訪問インタビュー・岡村昭彦」の録画DVDをお貸しいただき、私は自宅のテレビ画面で、二十年以上前の岡村に再会することになりました。第一回のインタビューの最後で、岡村は「権力に対抗するプログラム

は自分でつくる」と言っています。その言葉に再び接したときに、二十余年前の震えるような感動が蘇ってきました。そして、自分が十年以上続けてきた講座のスピリットは、ここに原点があったのだ、とはつきり自覚しました。

II 「差別」史観

二〇〇九年秋の日本生命倫理学会シンポジウム「日本におけるバイオエシカルな思想——『バイオエシックス』前史から未来へ」で岡村昭彦について話す機会があり、その報告原稿「岡村昭彦——ホスピスへの基点」を本会編『シャッター以前』第五号(二〇一〇年)に掲載していただきました。この報告では、劇作家の久保栄との出会いと訣別を軸に若き日の岡村の足跡を捉え、日本近代史を貫通する被差別部落問題こそが彼の思想的基点であると結論づけました。これが岡村における「日本史のシッポ」だと思えました。

岡村自身は「日本史のシッポ」という言葉は使っていませんが、「世界史のシッポ」については折に触れ語っています。「世界史のシッポを捉える」とは、「自前の独自の歴史観をもつ」ことです。独自の世界史観をもたない限りフリーランスは生き残れない。これが岡村の持論であり、信条でした。

岡村は、自分がいつ世界史のシッポを捉えたの

かを書いていきます。一九六八年から七〇年代初頭にかけて、岡村はビアフラ独立戦争を取材していますが、だいたいこの時代のことを「世界史のシッポをとらえつつあったときだ」と言っています。その後、ヴェトナムへの入国禁止処分が解けて七一年にラオス侵攻作戦を取材していますが、このときにはもう世界史のシッポを捉えていたと言います。

何をもって世界史のシッポを捉えたのか。岡村は六八年一月一日にアイルランドに初めて行っていますから、アイルランドのことではないか、と考えるのが第一感だろうと思います。岡村がその後ダブリン郊外に家をもち、妻子を住まわせていたことはよく知られている事実でしょう。

岡村は、ケネディの時代のヴェトナム戦争を「核時代における特殊戦争」と二重に捉えていました。アメリカ軍は、大量の核兵器を背景にしながら、しかしそれを直接使用することなく、特殊部隊を使った戦争を遂行していました。岡村が最も憤ったのは、ヴェトナムのなかで差別されている山岳部族をヴェトナム人の敵に仕立て上げるというケネディ大統領の戦略でした。そして、差別を逆手にとってそうした悪辣な仕掛けを案出したケネディが、アイルランド系移民の子孫、つまりアメリカ内における差別される少数者であることに岡村は当惑します。「被差別者が差別する」というパ

ラドックスを解き明かすために岡村はアイルランドに向かうことになりました。

アイルランドは宗教対立、民族対立、植民地支配、貧困等々、およそあらゆる世界史の矛盾が集約されているところとして認識されます。岡村はアイルランドの発見によって、日本と朝鮮の関係を見直し、カトリックとプロテスタントの対立という視点から世界情勢を読み直すこともしています。しかし、「世界史のシッポ」は、アイルランドのもう一つ先にあったようです。

「西アフリカのビアフラ独立戦争を取材して、世界史観がはつきりと変化した」のは、「私たちがヨーロッパの先進国と呼ぶ国の白人たちが、自分たちの砂糖やタバコのプランテーション用の労働力として、四〇〇年間に五〇〇万人にものぼる黒人たちが、鉄の鎖につないで西アフリカから連れ去ったという事実」を発見したからだと言岡村は書いています。「ドレイにされる黒人は、労働力用なのだから老人や赤ん坊ではない。若くて健康な、最も労働にたえうる男女が選ばれた。．．．このおかげで、あの貧しいヨーロッパは資本を蓄積して産業革命を達成し、若者たちを五〇〇〇万人も奪い取られた西アフリカは、いまだに農村社会に追いやられているのだ」(「ヴェトナム戦争は本当に終わったか」(一九七三)、『岡村昭彦集3』筑摩書房、三二八―九頁)と考察していま

す。

究極的な「差別」と言うべき黒人奴隷売買が近代世界史の根底に据えられることで、アイルランドを含むヨーロッパはつねにアフリカによって相対化されるべき存在として認識されることになりました。その「差別」史観から、EUの二代前のEECについては、「第二次世界大戦によって海外植民地を失ったヨーロッパの国々が、団結して『新』植民地主義者の集団になろうという発想だ」と捉え返し、「旧植民地支配時代の長い豊富な経験を持ち寄り、独立を許してしまったアフリカ大陸に、今も埋もれる資源を、いままでは違う、巧みな『新』植民地主義で支配しようというのが、EECなのである」「岡村昭彦「ベトナム戦争と水俣病——『新』植民地主義者の二つの顔」『国労文化』一九七二年七月号」と断定しています。ここには「正否」を越えた岡村独自の世界史観を見てとることができるはずで、そして、岡村の歴史観が「差別」を基軸に展開していったことが読みとれると思います。

III 「破壊」史観

岡村昭彦にとって一九六〇年代が「雄飛」の時代であったとすると、七〇年代は「雌伏」の時代、あまり成果の無い時代であったと言えるでしょう。一九七一年三月・四月、岡村のラオス侵攻作戦の



フォトストーリーは、アメリカの週刊グラフィック『ライフ』に華々しく掲載されますが、その『ライフ』は翌年休刊し、以降、岡村が世界的なスクープをものにすることもありませんでした。しかし、だからと言って、七〇年代が岡村にとって豊かな時代ではなかったとは言えません。むしろ「雌伏」の時代であったからこそ、沈潜して次の飛躍のための思考の芽を育んでいた、と考えることができ

ます。

その思考の拠点となったのは、ベスファルトでもピアフラでもなく、身近な静岡県舞阪町でした。一九六八年五月に母が亡くなると、遺された舞阪の家が岡村の日本における活動拠点になっていきます。ここで一九七七年に、舞阪漁民闘争と呼ばれる一連の問題が発生しています。

一つは西部衛生工場建設問題で、し尿の処理水を浜名湖のなかに流し込む計画です。もう一つが、西遠流域下水道終末処理場建設問題で、こちらは浜名湖の外側の遠州灘に処理水を流しこむ計画です。両方とも、漁師にとっては生活の場、生産の場を奪われる可能性のある重大な問題でした。

この問題を調べるために私は浜松市立中央図書館に行き、約五年分の主要紙「遠州版」を見ました。そのなかで思いがけず、「漁民闘争に生きるフリーランス岡村昭彦氏」という記事に出くわしました。

「かつて、母が漁民の子どもらを集め、幼稚園を舞阪町で開いていた。その時、ハナタレだった連中が運動の中心になっていた。それが『兄貴』として彼を求めた。彼自身は東京生まれだが、知人、友人のつながりは今も土地に残っているのだ。その母親への遠い記憶があざやかによみがえる家に、いま住んでいる。／これまでの豊富な彼の体験は、漁民の運動に大きな役割

を果たしている。正しいことを主張し、勝つ時代になりかかっている。十回の闘争で、六勝四敗の成績は立派な勝利。四敗が、いつか勝利への礎になるような負け方の運動に、という。／

『この闘争で、漁民の中に残るドロドロとしたものがなにを生み出すか』を、四十八歳の男は行動しながら考えている。その中には恥部を自分たちでなめあつて、つくりあげるものもあつてもいいではないか、とも。」「『朝日新聞』遠州版、一九七七年一月一七日』

これは記者が書いた文章なので、岡村の言葉がそのまま使われているかどうかは不明ですが、最後の部分は気になります。「傷をなめあう」とは言つても、「恥部をなめあう」という言葉はこのコンテキストでは使わないでしょう。「恥部」が具体的に何を意味しているのか、どのような背景があるのかいずれ調べたいと思つています。とりあえずこの古い地方版の記事によつて、岡村が地元の漁民たちと密接に交流した様子がよくわかりますし、岡村の意気込みも伝わってきます。

しかし、岡村はこの問題でほとんど成果を上げていません。ペンネームで論考を一つ残しているだけです。その論考は「H₂Oは神様の水とは違う」こと、つまり、どんなに科学的にきれいな水だと証明されても、それは「いのち」を育む神の水とは違うことを主張したものです。それは、浜

名漁協の漁師たちの「科学」や「技術」に対する不信感を背景にしたものですが、H₂Oと神の水の違いが論理的に詰められているわけではありません。

静岡県立大学図書館の岡村昭彦文庫を訪れると、岡村の凄味のようなものが伝わってきます。岡村の蔵書一万数千点を集めたこの文庫には、水に関わる膨大な資料、専門的文献も含まれていません。岡村は、小説さえも原資料として読むという気質のようで、原資料と高度な専門的文献以外のものをむしろ思考の妨げとして拒否しているようにさえ思えます。とにかく岡村が河川開発全般の問題について調査・研究していたことは間違いないと思います。おそらくそこには水俣とヴェトナムという二つの問題が重ね合わされていたように思います。

岡村は、水俣について主題的に語ってはいませんが、水俣をしばしば訪れていた形跡はあり、水俣病の批判も随所で行なっています。ただしそれは公害という結果に対する批判よりも、チツソという企業の歴史や体質への批判が基本的なスタンスになっています。チツソの前身は野口遵が創業した曾木電気株式会社です。一九二七年に当時植民地だった朝鮮に進出して、ダム建設と水力発電を基軸に一大コンビナートを築きあげ、戦後は、朝鮮での二十年間の収奪で蓄積された技術と財力

をもって水俣に戻ってきます。「『水俣病患者』の姿を、大きく目を開いて見すえようではないか。彼らの姿は、日本帝国主義下の資本の収奪にあえぐ、朝鮮人民の姿でなくて、なんであるろう」「それが国民の心理操作に成功したのか」(一九七二)、『岡村昭彦集3』二八五頁」というように、

朝鮮と水俣を「植民地主義」として結びつけることには一定の説得力はありますが、しかし水力発電それ自体が「差別」や「悪」であるとは直ちに断定できないはずですが、ところが、漁民闘争後に書かれた論考では、国土開発そのものを問題にするような論調が現れてきます。「野口遵が『大東亜戦争』の開始された年に創立した野口研究所は、早くも敗戦後の一九四七年二月の週刊朝日に、『山奥の谷間を総て湖に』という、国土復興構想を発表し、朝鮮や満州などの海外植民地でみがいた腕で、今度は日本国内の民衆を『内国植民地化』するための、ノロシをあげます。すでに『水俣病』をつくり出す思想が、そこにあります。」「(『TVAから揚子江まで』(一九七九)、『岡村昭彦集5』二七七頁)

ここにはもう一つヴェトナムという回路が介在しているように思います。岡村は漁民闘争のさなかの七八年夏、テネシー州ノックスビルのTVA(テネシー川流域開発公社)本部を訪れています。アメリカの反戦グループの一つが、「TVAこそ



ヴェトナム戦争の源泉だ」と主張したことが、天啓のように岡村を打ったのです。TVAを中心に据えることでヴェトナムと水俣と舞阪が全部繋がって見えてきた。そしてその繋がりには、六〇年代に培ってきた「差別」史観とは違う新しい視界から見えてきたものでした。公共事業という名の開発が「いのち」に与える影響に岡村は着目したのです。

日本でも戦後間もなく都留重人を中心に「TVA研究懇談会」がつくられます。後に一橋大学学長になる都留は、一九三〇年から四二年まで、ちょうどアメリカがTVAを中心とするニューディール政策で世界恐慌の疲弊から立ち直っていく時期に留学しています。岡村は都留がTVAを無批判に紹介したことを問題にします。「はじめての『経済白書』の作成者であり、戦後日本の復興計画に、大きな影響をあたえ続けた都留氏のTVA紹介が、定説として、敗戦後の日本に沈澱してしまった事実は大いさ。」（「TVAの神話はどうつくられたか」（一九八〇）、『岡村昭彦集5』二九三頁）

都留は、雑誌『公害研究』（岩波書店、後に『環境と公害』に改題）の創刊（一九七一年）メンバーであり、『公害の政治経済学』（岩波書店、一九七二年）を著す等、経済学者のなかでは最も初期の頃から公害問題に関心を寄せた先駆者です。その「良心的」経済学者によって絶賛されたTVAに範をとって建設されたのが、天竜川にかけられた佐久間ダムでした。そうした国土開発の行きつく先は、田中角栄内閣の誕生、つまり「日本列島改造論」に典型的に見られる「開発という名の破壊」だったのではないかと、岡村は問いかけているのです。

高度経済成長という光には、「自然破壊」と「棄

民」という陰が付いてまわります。その象徴が水俣です。水俣病をもたらした元凶のチソが朝鮮でのダム建設、国土開発によって巨利を得た企業であることを考えれば、そもそも理想的な開発とされたTVAとは何だったのか、それを手放して誉め称えた都留重人の思想も含めて、再検討に付されなければならなかったのです。

岡村がこれほど遮二無二TVAを問題にするのは、TVAとヴェトナム戦争との間に太い線を見いだしていたからです。「TVAこそヴェトナム戦争の源泉だ」という反戦グループの主張に根拠がないわけではありません。一九六五年にアメリカはヴェトナムに本格的に介入しますが、戦闘の傍らで戦後処理、戦後復興の準備を進めていました。その表われが「リリエンソール報告」と呼ばれる報告書（アメリカ・南ベトナム合同開発調査班編（安芸皎一・高橋裕訳）『ベトナムの戦後開発』原著…一九七〇年。時事通信社、一九七〇年）です。リリエンソール（David E. Lilienthal）を筆頭に、アメリカと南ヴェトナム関係者が集まって、メコンデルタの開発を中心にヴェトナム戦後の開発を構想しています。TVAに範をとった「メコンデルタ開発公社」の設立も提言されています。岡村はリリエンソールという人物の足跡を辿りながら、TVAとヴェトナム戦争の結び目を緻密に検証しようとしています。しかし、戦争という

破壊が開発復興と抱き合わせになっているとは言えたとしても、開発それ自体が破壊と結びついていくという決定的な証拠は見いだすことができない。リリエンソールの胡散臭さを独特の嗅覚で感じるにとどまっています。

構想倒れにはなりませんが、岡村が「差別」史観を根底に据えながら、その歴史観に「いのち」という要素を新たに入れようとしたことは確かでしょう。「神の水」に育まれている幾多の「いのち」を守り続けなければ、やがて人間の「いのち」が危うくなる。水は「いのち」そのものとも言えます。その問題と苦闘しているときに、岡村は一九八〇年バイオエシックスに出会い、「いのち」の問題を全面的に展開することになります。

おわりに

岡村が一九七〇年代に考え続けたのは、大きくいえば「近代」の根源的な見直しでしょう。開発が自然を破壊して、そのことのツケが最も弱い者たちに廻ってくるという公害の構図を、近代文明全般までに引き延ばして考えようとしていたのだろうと思います。

東日本大震災、福島原発事故という未曾有の事態に直面している私たちは、いま大きな価値観の分かれ目に立っています。もちろん私たちは近代的な価値観から完全に自由になることはできません

んが、「効率性」や「利便性」が「いのち」の存在を危うくするという事態は完全に逆立ちしていません。本来、「幸福」や「快樂」のために追求された「効率性」や「利便性」が「幸福」や「快樂」の根源にある「いのち」をも奪いかねないところまで膨張してしまっているのだとしたら、「近代」の社会システムそれ自体が問い直されなければなりません。TVAや都留重人をも根源的に再検討しようとした岡村のラディカルな視点は今こそ見直されてよいと考えています。

さらに言えば、「復興」が新たな「創造」でなければならぬとしたら、自然と人間の関係について、人間と人間の関係について新たなヴィジョンが問われることになります。その点でも、岡村の思想は、私たちに一つの希望を投げかけています。彼はたんに批判するだけの人ではなく、つねに新しい時代への展望を考え抜いていた人でした。「いのち」を守り、育むための新たなヴィジョンを岡村は次のように語っています。

「原爆症、サリドマイド、スモン、水俣、筋ジストロフィーと、心に数かぎりなく傷を負った人々が、日本には沢山いるではないか。この人たちこそ、日本にバイオエシックスを生み出すために、中心の役割を果たすエネルギーの中核なのである。体に傷を負った人間は、心にも傷を負っているものだ。人間の歴史は、心に傷を

負った人々により、豊かで優れた文化遺産を持つてきたことを忘れることはできない。」〔「日本にバイオエシックスを生み出すために」(一九八一)、『岡村昭彦集5』三三三頁〕

これはバイオエシックスについて述べていることですが、「バイオエシックス」を「新しい文化」と読み換えれば、日本に新しい文化を生み出す中核的な役割をするのは、「体に傷を負った人間」「心に傷を負った人々」だということになります。「差別」され、「破壊」の犠牲になった人たちがそが新しい文化の担い手になるという発想は、彼が世界史のシッポをつかまえた成果としての「差別」史観と七〇年代に模索しつづけた「破壊」史観の総合のうえに成りたつてるように思います。私は、この岡村の発想を大切に抱え育てながら、新しい時代への自前のヴィジョンを構想したいと考えています。

〔本稿は、高草木光一「岡村昭彦とバイオエシックス」(安藤泰至編『「いのちの思想」を掘り起こす(仮題)』岩波書店、二〇一一年一〇月刊行予定、所収)の一部を基礎にしている。〕

【略歴】1956年生まれ。80年慶應義塾大学経済学部卒業。83年同大学院修士課程修了。同大学経済学部助手、同助教授を経て、2001年同教授。担当科目は会思想、現代社会史。著書『一九六〇年代 未来へつづく思想―連続講義』(岩波書店2012)ほか。

事務局便り

1. AKHIKOの会の活動を活発化するために世話人として新たに高草木光一さん、比留間洋一さん、細野容子さん、松澤和正さん、横山巖さん、戸田昌子さん、事務局として大伴好海さん、堀川敬代さんが引き受けてくださいましたのでご紹介いたします。事務局では最新のアキヒコ関連情報を作るべく早く皆様にお届けする体勢を作りたいと思っております。そのため情報配信ご希望の方はメールアドレスをお知らせください。
2. 静岡県立大学比留間研究室では「岡村昭彦文庫ミュージアム化プロジェクト」して、2011年3月14日から22日にかけてベトナム（ソニン、ホーチミン、ベンチエ）においてフィールドワークを実施し、その成果を岡村昭彦文庫において展示中（6/20から8/11）
岡村文庫訪問の折には、事前に「一報の上げひ比留間先生（054-264-5364）もお訪ねください。」
3. 静岡県立大学図書館岡村昭彦文庫の魅力を紹介するブログが開設されています。
<http://akihikobunko.seesaa.net/>
4. 「岡村さんと母親たちの会」での岡村さんの講演を冊子にした第2号『ホスピスへの遠い道』副読本「ホスピスの心を求めて」ができました。「希

望の方は事務局まで連絡ください。（頒価200円＋送料でお送りします）なお第1号「岡村昭彦写真展副読本―国際報道写真家にとつての死と生」（頒価200円＋送料）もあります。

5. 「アキヒコゼミ 夏合宿」のご案内

AKHIKOの会世話人米沢慧氏主宰による恒例夏合宿を久方ぶりに実施します。

メッセージ 「アキヒコの気脈と信州の風

日時： 8月20日（土）午後1時～

21日（日）午前中

会場： 長野県上田市前山 マルタの家

参加費： 13000円（1泊2食・宿泊・

懇親会・講師料等含む）。交通費別。

申込み： 7月20日締めぎり（以後でも受付可）

申込先： アキヒコの会事務局（頁末参照）

※参加申込者には8月初旬に演題・ゲスト講師含む日程表等お知らせします。どなたでも参加できます。

6. 「没後のアキヒコ・オカムラ」資料編

2010年

5・16 深夜叢書社「間門園日記 山本周五郎」「夫妻と

共に」齋藤博子

7・4 毎日新聞日曜版「目撃された戦後」三留理男

7・30 「オアシス」（「市民ホスピス・福岡」機関

誌No.216）「クロード神父」と私とのかかわりにつ

いて 隈崎行輝

8・27 岩波書店『父を焼く―上野英信と筑豊』上野朱

8・30 「オアシス」（「市民ホスピス・福岡」機関誌No.217）「クロード神父」と私とのかかわりにつ

いて② 隈崎行輝

9・1 PHP研究所『望郷酒場を行く』森まゆみ

12・9 講談社『サイゴンハートブレイク・ホテル日

本人記者たちのベトナム戦争』平敷安常

12・29 『ヴェトナム戦争の初期報道における日本の

ジャーナリズム』岩間優希

2011年

1・30 朝日新聞出版『自然死への道』米沢慧

3・23 洋泉社MOOK『戦場カメラマンという仕事』

3・中部大学2011年3月発行・風媒社発売『学問

の森へ 若き探求者による誘い』

4・30 「オアシス」（「市民ホスピス・福岡」機関

誌No.225）不思議な旅の日々 隈崎行輝

6・25 響文社 『風のcafe 木漏れ日 函館』

西野鷹志

『岡村昭彦の会』会報第二一号（2011・7・1）

発行 東京都江戸川区西小岩五―十一―二十七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 03-3657-8380

*ホームページ <http://akihiko.kazekusa.jp/>

*メールアドレス akihiko-no-kai@kazekusa.jp